

ヨハネの手紙第一5章14-15節 「神に聞かれる祈り」

1A みこころに従った願い 14

1B 何事でも聞かれる願い

2B みこころ

1C 神の計画

2C 心に置かれる神の願い

3C 一つにされた心に現れる力

2A すでに手にした願い 15

1B 信仰による祈り

2B 確信に基づく平安

1C 詩篇の祈り

2C ゲツセマネの主の祈り

本文

ヨハネの手紙第一 5 章を開いてください。今晚は 14-15 節を見ます、「¹⁴ 何事でも神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださるといこと、これこそ神に対して私たちが抱いている確信です。¹⁵ 私たちが願うことは何でも神が聞いてくださると分かるなら、私たちは、神に願い求めたことをすでに手にしていると分かります。」

祈りにおける神との交わりについて学びます。私たちは前回、「神の御子を信じている者たちに、永遠のいのちを持っていること」を分かってほしいという、ヨハネの思いを読みました。13 節に、「神の御子の名を信じているあなたがたに、これらのことを書いたのは、永遠のいのちを持っていることを、あなたがたに分からせるためです。」とあります。私たちは、それが今のいのちが永続することを必ずしも意味しないことを学びました。それよりも、「御子を持つ者はいのちを持っており(5:12)」とあるように、御子ご自身がいのちであり、私がこの方と交わっているところにいのちがある、ということです。ヨハネが第一の手紙の始めに、「私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。(1:3)」とあったとおりです。

その交わりの中に招き入れられた私たちに、イエス様は、「わたしに留まりなさい」「わたしのことばが、あなたがたに留まっているなら、実を結ぶ」であるとか、「わたしを愛する者は、わたしの戒めを守るはずです。」であるとか、交わりの中にある、私たちの営みについて主は、ヨハネ 14 章から 16 章にかけて語って下さいました。第一の手紙でも、同じことをヨハネは語っていますね。それもそのはず、主から聞いたことをそのまま書き記しているのが福音書で、長老であるヨハネが主の教えに基づいて、信者たちに手紙を書いているのがこの手紙ですから。

1A みこころに従った願い 14

1B 何事でも聞かれる願い

そして、その交わりの営みとして、「父が、わたしの名によって、あなたがたの願いを何でも聞かれる」ということがあるのです。「ヨハ 14:13 またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは、何でもそれをしてあげます。父が子によって栄光をお受けになるためです。」「15:7 あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまっているなら、何でも欲しいものを求めなさい。そうすれば、それはかなえられます。」そして、「16:24 今まで、あなたがたは、わたしの名によって何も求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けます。あなたがたの喜びが満ちあふれるようになるためです。」とあります。そして第一の手紙では、「3:22 そして、求めるものを何でも神からいただくことができます。私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行っているからです。」とヨハネは教えているのです。そしてここでまた、「**何事でも神のみこころにしたがって願うなら、神は聞いてくださるということ**」と教えています。

祈りについての本質が、私たち御子を信じる者たちが、他のいわゆる「祈り」とは、大きく異なることがわかるでしょう。祈りは、自分の願いがかなえられる手段として、自分自身が焦点になっています。けれども、キリスト者の祈りは、父と子との交わりが焦点になっているのです。この方から愛されていること、この方のいのちを持っていることを確認するために、祈りが与えられているのです！ イエス様は、肉の父、地上の父でも、子の願いを聞かないことはないとして、次のように言われました。「マタ 7:9 あなたがたのうちのだれが、自分の子がパンを求めているのに石を与えるでしょうか。10 魚を求めているのに、蛇を与えるでしょうか。11 このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与えることを知っているのです。それならなおのこと、天におられるあなたがたの父は、ご自分に求める者たちに、良いものを与えてくださらないことがあるでしょうか。」お父さんの方々、ご自分の息子に願っていることをあげたいと思っていますね。意地悪をして願っていることではないものをわざと与えることはありませんね。それは悪い父であっても、そうだとイエス様は言うておられます。ましてや天の父は、良いものをご自分に求める者たちに与えてくださるのです。

イエス様ご自身が、そうした願いを父なる神に立てて、その願いが聞かれたことを語っておられる箇所があります。ラザロのよみがえりです。主が人々の前で祈られました。「ヨハ 11:41-42 父よ、わたしの願いを聞いてくださったことを感謝します。42 あなたはいつでもわたしの願いを聞いてくださると、わたしは知っておりましたが、周りにいる人たちのために、こう申し上げました。あなたがわたしを遣わされたことを、彼らが信じるようになるために。」そして、ラザロよ、出て来なさいと叫びます。この父と子の関係を、私たちにも恵みとして与えられています。

2B みこころ

そして、ここで大事なのが「みこころ」であります。「**何事でも神のみこころにしたがって願うなら**」

とヨハネは言っていますね。これは言い換えるならば、「神の命令に従っているなら」であるとか、「神の願いを願っているなら」と言い換えることができます。神との交わりにおいて、この方の願われていること、この方の意志を敬い、この方に従っている中で、初めて自分の願い事は何でも聞いてくださるのです。先ほど読んだ、何でも父が聞いてくださると言われたイエス様の言葉を、もう一度読みます。「ヨハ 15:7 あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまっているなら、何でも欲しいものを求めなさい。そうすれば、それはかなえられます。」イエス様に留まり、この方のみことばが自分に留まっているならば、何でも欲しいものを求めたら、それがかなえられるということです。第一の手紙でも、「3:22 そして、求めるものを何でも神からいただくことができます。私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行っているからです。」とヨハネは言っていましたね。神の命令を守り、神に喜ばれていることを行っているから、求めるものを何でも神からいただくことができるのです。

1C 神の計画

そもそも、神に祈るということが、キリスト者にとって、普通に考えられるものと大きく違うのです。自分の意志がかなえられるための手段ではないのです。神の意志がかなえられるための手段なのです。チャック・スミスは、著書「効果的な祈りの生活(Effective Prayer Life Chapter2)」で、こう言っています。「祈りは、神のご計画を変えません。しかし、祈りは神のみわざを変えます。イエスは言いました。「マタ 6:8 あなたがたの父は、あなたがたが求める前から、あなたがたに必要なものを知っておられるのです。」あなたの祈りは、神にあなたの状況を知らせているのではないのです。神はあなたが願う前に、すべての必要をご存じなのです。しかしあなたの祈りが扉を開け、神が望まれることを実現する機会を与えるのです。神はあなたの自由意思に反することはなさないからです。」

神のご計画はどんなことをしても、変えることはできません。そもそも、神のみこころを変えようとする試みこそ、愚かなことです。この方のみこころが最善なので、みこころを変えようとする試みは、最善から引き降ろすことです。イエス様はゲッセマネの園で、祈られました。「マタ 26:39b わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしが望むようではなく、あなたが望まれるままに、なさってください。」主ご自身が、こうやって父なる神のみこころに従ったのです。これは、この方から見捨てられる苦しみを十字架で背負うことでありましたが、しかし、そのことによって私たちが、私たちの罪によって見捨てられるところから救うご計画だったのです。

神のご計画は変わりません。永遠の昔から変わりません。しかし、私たちが信仰をもって祈ることによって、その約束されたことにあずかるかどうかが変わります。救いはその一つですね。神はひとりとして滅ぶことを願われていません。すべての人が救われるのを願っておられます(1テモテ 2:4)。けれども、信じる者、信じて受け入れ、そのように願う者のみが、救いの賜物を受け取る

ことができます。同じように、神はご計画がありますが、私たちは祈りによって、その中に関わる
ことができるのです。神のみこころを変えるのではなく、神のみこころが祈りによって私たちに成るよ
うになるのです。イエス様が祈れと言われた通りですね、「マタ 6:10b みこころが天で行われるよう
に、地でも行われますように。」

2C 心に置かれる神の願い

私たちが、祈り、神と交わり、この方のみこころを、みことばによって知っていく中で、御霊は、私
たちに神の思いを置いてくださいます。「詩 37:4 【主】を自らの喜びとせよ。主はあなたの心の願
いをかなえてくださる。」英語の聖書ですと、「主は、あなたの願いを与えられる」と訳されています。
願いをかなえる、というよりも、願いそのものを与えてくださるのです。ピリピ人への手紙で、パウロ
は、「2:13 神はみこころのままに、あなたがたのうちで働いて志しを立てさせ、事を行わせてくださ
る方です。」と教えました。

預言者サムエルの母、ハンナのことを思います。時は士師がイスラエルを治めていた時です。
「それぞれが自分の目に良いことを行っていた。(21:25)」時です。その時に、「Ⅰサム 1:5 主は彼
女(ハンナ)のタイを閉じておられた。」とあります。これは、実にむごいことのように見えますね。ハ
ンナも非常につらくなります。彼女は主の宮で祈っていました。言葉にならない祈りでした、ただ唇
が動いていたのです。けれども、その辛さの中でこんな願いを立てたのです。「【新改訳 2017】Ⅰ
サム 1:11 万軍の【主】よ。もし、あなたがはしための苦しみをご覧になり、私を心に留め、このは
しめを忘れず、男の子を下さるなら、私はその子を一生の間、【主】にお渡しします。そしてその子
の頭にかみそりを当てません。」ハンナは、生まれてくる男の子を、一生の間、主にお渡しするとい
う祈りを献げたのです。主がハンナを敢えて不妊にしていたのは、彼女の心に、主のみこころが置
かれるためなのです。士師の時代、霊的な混沌状態でした。そこで、主にすべてを献げる人が必
要でした。その預言者がイスラエルの指導者となり、人々を主に立ち返らせ、主のことばで養育
てられる必要があったのです。サムエルが生まれた時に、ハンナは乳離れしたらすぐに、主の幕
屋にこの子を献げたのです。一緒に住むことができないのに、そうしたのです。そうして、サムエル
は主の声を聞くようになりました。

ですから、祈りによって、神の願いは還元されます。それはあたたかも、海から蒸発した水分が空
に上昇し、空で雲となり雨を降らせ、それが川となり、再び海に戻るかのようです。神の心が人の
心に与えられ、それを人が祈ることによって神に戻り、神がそのわざを行われます。

3C 一つにされた心に現れる力

こうやって、思いが神と人とが一つになると、神は大きな力を地上に現されます。「Ⅱ歴代 16:9a
【主】はその御目をもって全地を隅々まで見渡し、その心がご自分と全く一つになっている人々に
御力を現してくださるのです。」心が神と全く一つになっている時に、御力を現わされます。

そして、「これこそ神に対して私たちが抱いている確信です。」とヨハネは言っていますが、ヨハネは確信という言葉、第一の手紙で何度となく使っていますね。これは大胆さを表すことばです。主が再び来られても、私たちは大胆に主の前に出ることができる約束について、以前、話しました。ここでは、祈りが聞かれるという大胆さです。図々しいと思いませんか、何事も聞かれるのですよ！けれども、神に愛された者には、このような確信が与えられるのです。「ヘブ 4:16 ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」

2A すでに手にした願い 15

¹⁵ 私たちが願うことは何でも神が聞いてくださると分かるなら、私たちは、神に願い求めたことをすでに手にしていると分かります。

1B 信仰による祈り

すでに手にしているという約束です。イエス様が、エルサレムに入城された時に、葉の生い茂った木を見て、実がなかったので呪われましたが、それが根こそぎ枯れていました。ペテロがそのことを指摘すると、イエス様は、「神を信じなさい。」と言われました。そしてこう言われます、「マル 11:24 ですから、あなたがたに言います。あなたがたが祈り求めるものは何でも、すでに得たと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」願いが聞かれたことを知っているのなら、それをすでに手にしていることが分かるとは、それだけ信じているということです。信仰をもって願い、祈るということです。ヤコブが、手紙でこう言いました。「1:5-7 あなたがたのうちに、知恵に欠けている人がいるなら、その人は、だれにでも惜しみなく、とがめることなく与えてくださる神に求めなさい。そうすれば与えられます。6 ただし、少しも疑わずに、信じて求めなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。7 その人は、主から何かをいただけたらと思っただけで満足してはなりません。」信じて求めるのであり、疑ってはいけないということです。父なる神に対して信頼をなくして、どうして願っているのでしょうか？主が、与えると答えてくださったら、そうなんだと信じる必要があります。

2B 確信に基づく平安

まだ自分の目で見えていないのに、それでも神が与えてくださったとして、主をほめたたえている人々が聖書に出てきます。

1C 詩篇の祈り

詩篇は、まだ実現していないのに、すでに主が聞いてくださったと確信して、それで主をほめたたえているという内容のものが非常に多いです。私は今、朝に詩篇を読んでいます、今朝は35篇でした。ダビデは、自分に争いを仕掛けてくる人たちがいたようで、それで懇願しています。「35:1 主よ、私と争う人と争い、私と戦う者と戦ってください。私を助けに来てください。」こうやって祈っています。彼らが自分たちでしかけた罠に自らが落ち込みますように、と祈った後に、9節を見ます

と、こうなっています。「私のたましいは、主にあって喜び、御救いの中にあって楽しめます。」そう賛美に変わっているのです。この時点で、悪意を持っている者たちが彼を攻撃しなくなったとは限りません。けれども、自分の敵に対する祈りが、主に聞かれたと確信して、それでその場で主をほめたたえているのです。これが、「**私たちは、神に願い求めたことをすでに手にしている**」という意味です。

2C ゲッセマネの主の祈り

イエス様も、ゲッセマネの園において、そのような確信が与えられたのではないか、と思います。つまり、主は、杯を取り去ってくださるよう祈られました。でも、父のみこころがなるようにとも祈られました。それを三回、繰り返されました。そして、眠っていた弟子たちを起こして、「マタ 26:45 見なさい。時が来ました。人の子は罪人たちの手に渡されます。」その時の様子を、ヘブル書の著者はこう記しています。「5:7 キリストは、肉体をもって生きている間、自分を死から救い出すことができる方に向かって、大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ、その敬虔のゆえに聞き入れられました。」自分を死から救ってくださる祈りが聞かれた、と言っています。これはもちろん、死を免れることではなく、死んでもよみがえることを意味しています。まだこれから捕らえられて、十字架に付けられるのに、十字架上で死んだ後、三日目によみがえることについての祈りが、聞かれたことをイエス様は確信したのです。神に願い求めたことが、こうやってすでに手にしていることを、確信することができます。

それほど、神との親密な交わりを、神を信じる中で得られる交わりを持っているということです。私たちは、永遠のいのちが祈りの中で実感できることを覚えて、これからも祈っていききたいと思います。